

ジェンダー認識の変化

—新聞投書を利用して—

熊谷 滋子

1. はじめに

自らのジェンダー認識を考えることは必ずしも快いことではない。日本に男女共同参画社会基本法ができて10年。国連の女性差別撤廃条約を批准したのが1985年。日本政府も女性差別を無くすために動いてきたはずである。しかし、例えば、2009年、国連女性差別撤廃委員会からも勧告されているように、依然として、雇用や政府、政治の場での女性の少なさ、地位の低さがある。原因の一つとして、メディアなどでの、旧来の女らしさのステレオタイプや性的対象化が根強くあることが指摘されている。このような背景を念頭に、大学生のジェンダー認識がどのように変化してきたのか、新聞投書を利用して考えてみたい。

調査は、主に大学生を対象とし、1997年におきた山一証券自主廃業関連の新聞投書（「朝日新聞東京版」に掲載されたもの）のうち8通について、書き手の個人情報（住所、氏名、職業、年齢）をふせて読んでもらい、書き手の性を推測し、その推測理由もあげてもらおうという、きわめて単純なものである。この調査を思いついた過程や方法の意義については、拙稿（2002）にまとめているので、そちらを参照されたい。

今回は、1999年から2008年まで継続的に行ってきた調査のうち、1999年と2008年の結果を比較し、そこで判断された性やその判断理由から、読み手である大学生のジェンダー認識に変化が生じているのかどうかという点を中心に考察する。

2. 判断された性にみる割合の変化

1999年と2008年の判断結果をまず表2・3に示す。ここで取り上げる調査対象人数は少ないが、便宜上、比較しやすい人数のクラスを、それぞれの年

度で一つずつピックアップしたものである。1999年は、47名（男性回答者8名、女性回答者39名）、2008年は、38名（男性回答者14名、女性回答者24名）である。男女の数にばらつきがあり、特に男性回答者の少なさが目立つため、回答者の性で比較をするのは妥当ではないかもしれないが、あくまで大雑把な傾向をつかむために、カッコ内に示した割合（%）を中心にみてほしい（ただし、回答者の少なさが、割合を大きく左右してしまうことは筆者も承知している）。なお、調査対象とした投書は、①～⑧という番号で示す。まず、以下に、投書のタイトル、書き手の性と職業、年齢、掲載された日付（いずれも1997年）、そして、要約を紹介する。

- ① 「経営破たんの法的責任問え」 男性、無職、62歳、11月26日
公的支援をするなら、経営者の法的責任を追及すべきである。
- ② 「本当に強いね山一のみんな」 女性、主婦、32歳、12月9日
かつて勤務していた山一の破たんを知り、同期だった女性に電話をかけてみたら、逆に、彼女の強さを知った。
- ③ 「山一での過去捨てて未来を」 男性、会社員、48歳、12月17日
体をこわして退職し、40過ぎて再就職した自身には、山一の社員は特別扱いされていると感じる。プライドをもって生きぬけとエールを送る。
- ④ 「どこまで続くバブルのツケ」 女性、主婦、46歳、11月29日
金融業界の破たんはバブルのツケである。今後、この教訓が生かされる日は来るのか。
- ⑤ 「山一の社員を郵貯で生かせ」 女性、経理パート、36歳、12月10日
郵貯で、金融知識の豊富な山一社員を活用すべきである。
- ⑥ 「破たんの責任私財提供せよ」 男性、元信組理事、63歳、12月18日
自身の信用組合が危機に陥ったとき、私財全部を提供し、一から再出発した。銀行等は赤字でも給与や退職金をそのままにしておくのはおかしい。
- ⑦ 「山一ミディの母よ頑張って」 女性、主婦、33歳、12月18日
山一ミディである母が、破たん後、良心の呵責で憔悴している。頑張っ

て欲しい。

⑧ 「公的支援なら責任追及を」 男性、弁護士、52歳、11月27日

公的支援をするなら、アメリカ並みに経営者の責任追及をすべきである。

調査対象の投書について、文体（「です・ます」体かどうか）と内容（個人的な内容（例えば、女性の友人がいるとか、退職したなど）が含まれているかどうか）という2点を組み合わせて4つのタイプに分け、それぞれにあてはまる男女の投書を選び出している。これをまとめたものを表1に示す。

表1 調査対象とした投書のタイプ

分類	です・ます体	個人的な内容	投書番号（男性）	投書番号（女性）
1	○	×	①	⑤
2	×	○	⑥	②
3	○	○	③	⑦
4	×	×	⑧	④

○：あてはまる ×：あてはまらない

表1を説明すると、例えば、①の投書は、「です・ます」体で書かれ、個人的な内容をもたない、男性からのものである。このような分類による投書8通を用いて、調査を行った。その結果を表2・3に示す。上段が、1999年の結果、下段が2008年の結果である。数字は、判断した回答者の人数を示し、カッコ内は割合（％）である。また、「？」は、性の判断がつかねるとされたものである。

男性回答者について、表2から分かることは、1999年も2008年も共に、①と⑤以外については、同じような割合で判断が行われているということである。これについては、様々なことが考えられるが、その一つとして、1999年と2008年では、男女の置かれた社会状況にそれほど大きな変化がみられず、ジェンダー認識にもそれほどの変化がもたらされなかったということかもしれない。

書き手の個人的な内容が書かれている②③⑥⑦については、その正答率が

高い。また、③④⑤⑧については、書き手の性が判断できない、「？」とする割合が、2008年で増加している。したがって、全体としては同じ傾向にあるものの、投書によっては、11年前の出来事ゆえに、理解が不十分で判断ができないとされているのかもしれない。

表2 男性回答者 (数字は回答者の人数、カッコ内は割合(%))

投書番号	年度	男性と判断	女性と判断	？
①	1999	2(25.0)	3(37.5)	3(37.5)
	2008	7(50.0)	5(35.7)	2(14.2)
②	1999	0	8(100.0)	0
	2008	1(7.1)	13(92.8)	0
③	1999	8(100.0)	0	0
	2008	12(85.7)	1(7.1)	1(7.1)
④	1999	8(100.0)	0	0
	2008	9(64.2)	0	5(35.7)
⑤	1999	2(25.0)	3(37.5)	3(37.5)
	2008	3(21.4)	5(35.7)	6(42.8)
⑥	1999	8(100.0)	0	0
	2008	13(92.8)	1(7.1)	0
⑦	1999	1(12.5)	7(87.5)	0
	2008	1(7.1)	13(92.8)	0
⑧	1999	7(87.5)	1(12.5)	0
	2008	12(85.7)	0	2(14.2)

次に女性回答者の方をみてみよう。表3から、女性回答者の場合、男性回答者と同様に、1999年と2008年では、①以外について、ある程度の共通性をもっていることが分かる。これは、前述したように、ジェンダー認識との関係から、なんらかの共通性が見出せるかもしれない。一方で、①③④⑥⑦⑧について、「？」と判断する割合が増加し、書き手の性の判断がつかかねてい

る状況もある。また、2008年は、1999年に比べて、全体として判断に偏り度が少なく、例えば、①では、男性と判断している割合が37.5%なのに対し、女性と判断している割合が29.1%、「？」とするものが33.3%となっている。1999年では、それぞれ、28.2%、64.1%、7.6%と、女性と判断する割合に偏りがある。④についても、1999年は、男性と判断した割合は、76.9%に対し、2008年は58.3%と減り、その分「？」の割合が高くなっている

表3 女性回答者 (数字は回答者の人数、カッコ内は割合(%))

投書番号	年度	男性と判断	女性と判断	？
①	1999	11 (28.2)	25(64.1)	3(7.6)
	2008	9 (37.5)	7((29.1)	8(33.3)
②	1999	2(5.1)	37(94.8)	0
	2008	2(8.3)	22(91.6)	0
③	1999	37(94.8)	1(2.5)	1(2.5)
	2008	21(87.5)	2(8.3)	1(4.1)
④	1999	30(76.9)	8(20.5)	1(2.5)
	2008	14(58.3)	4(16.6)	6(25.0)
⑤	1999	16(41.0)	19(48.7)	4(10.2)
	2008	11(45.3)	11(45.3)	2(8.3)
⑥	1999	36(92.8)	2(5.1)	1(2.5)
	2008	17(70.8)	2(8.3)	5(20.8)
⑦	1999	4(10.2)	34(87.1)	1(2.5)
	2008	2(8.3)	20(83.3)	2(8.3)
⑧	1999	32(82.0)	3(7.6)	4(10.2)
	2008	18(75.0)	2(8.3)	4(16.6)

男女両方の回答結果からいえることは、第一に、特に個人的な内容がある投書について(②③⑥⑦)は、書き手の性が正しく判断できているということである。つまり、1999年当時も2008年も、投書に記述された個人的な内容

は、特に仕事に関連した事柄（再就職した、同期だった女性等）ゆえか、男女の区別が容易につくものであったと推測できる。いわば、社会における男女の平等が若干でも改善されてはいるものの、今日にあっても1997年（山一証券自主廃業当時）と同様な男女をめぐる社会状況が強くあるため、読み手である大学生は、正しく判断できたのではないかと考える。

第二に、④について、個人的な内容もなく、「だ・である」体で書かれており、また、扱っているトピックが「バブル」という金融関係のことであり、男女ともに、書き手を男性と判断しているものが多いが、2008年は、その割合が減り、「？」と判断する割合が高くなっている。ただし、男性回答者では、女性と判断した人が、1999年も2008年もいない。この点について言えることは、「男性＝金融」というイメージが若干でも薄れてきているものの、それが女性とイメージするまでには至っていないのではないかとということである。

第三に、第二と関連して、2008年での④に典型的にみられるように、書き手の性が判断できないとするものが増えたということがある。これについては、11年前の出来事を扱っている投書なので、その出来事自体への理解が不十分になる分、判断がつかねえということもあるだろう。しかし、下にあげるように、女性回答者には、どちらかの性に判断すること自体、差別的な発想になりかねないとし、判断行為をするにつれて感じる居心地の悪さを吐露しているものが少なくない。この点を的確に示す回答者の感想の一つを紹介しておく。

「今まで読んで、初めは論理的である、ないを基準として見てきたけど、全ての女性が論理的でないことはありえないし、男性も感情的になるし、自分の考えが差別に直結しているようで嫌になり、考えるのもバカらしくなって……結局どっちかなんて決められませんでした。」

（2008年の女性回答者）

願わくば、このような性別判断調査を通して、男女のステレオタイプに気づくことで現実にある男女をめぐる（非対称的な）関係を見つめなおすことにつながればと思っている。

3. 判断理由にみる変化

ここでは、判断理由としてあげられたものの中から、とくに目立ったものをいくつかピックアップして、その傾向をみていく。今回は、判断理由を、「語彙や文末表現」、「論理展開」、「現実認識」と3つに分けて、1999年と2008年の割合を比較する。

最初に、語彙や文末表現についてみる。語彙に関しては、もっぱら男性と判断した際の理由としてあげられていて、たとえば、漢字を多用しているとか、難しい語彙を使用しているなどである。また、文末表現は、固い表現・「だ・である」体か、やわらかい表現・「です・ます」体などがある。表4・5にまとめた。表の数字は、いずれも判断理由としてあげた回答者の人数であり、カッコ内は割合(%)である。

表4 ＜語彙・文末表現＞ 男性と判断した理由

		漢字・難しい語彙	専門用語	固い表現・「だ・である」体	断定的表現
男 性 回答者	1999年	0	1(12.5)	3(37.5)	3(37.5)
	2008年	1(7.1)	1(7.1)	3(21.4)	6(42.8)
女 性 回答者	1999年	4(10.2)	4(10.2)	9(23.0)	11(28.2)
	2008年	5(20.8)	7(29.1)	6(25.0)	9(37.5)

表5 ＜語彙・文末表現＞ 女性と判断した理由

		やわらかい表現・「です・ます」体	問いかけ口調	ねちねちとした口調
男 性 回答者	1999年	6(81.0)	4(50.0)	0
	2008年	7(50.0)	4(28.5)	0
女 性 回答者	1999年	28(71.7)	7(17.9)	2(5.1)
	2008年	9(37.5)	9(37.5)	0

語彙や文末表現からみた判断理由は、1999年と2008年は共通しており、男性の投書は、漢字や難しい語彙、専門用語を使用するとしている。その割合は、特に女性回答者で増えている。一方、女性と判断した理由として、やわらかい表現や「です・ます」体で書かれているという割合が、男女とも多く、

「女性の文体はやわらかい」というイメージが強くあることを示している。しかし、その割合は、減っていることも確認しておきたい。

次に、論理展開についてみてみよう。表6・7にまとめている。

表6 <論理展開> 男性と判断した理由

		理論的・論理的	客観的	批判的	専門的
男性回答者	1999年	0	0	3(37.5)	1(12.5)
	2008年	1(7.1)	2(14.2)	4(28.5)	1(7.1)
女性回答者	1999年	4(10.2)	4(10.2)	9(23.0)	4(10.2)
	2008年	3(12.5)	4(16.6)	5(20.8)	3(12.5)

表7 <論理展開> 女性と判断した理由

		感情的	主観的	幼い	楽観的・前向き
男性回答者	1999年	0	0	0	0
	2008年	3(21.4)	0	2(14.2)	2(14.2)
女性回答者	1999年	9(23.0)	1(2.5)	0	1(2.5)
	2008年	13(54.1)	2(8.3)	0	0

論理展開に関わる判断理由では、男性の投書が、理論的・客観的・批判的だと感じるのは男女ともに共通しているが、女性回答者の方が全体的にその割合が増加している。例えば、女性の投書について、女性回答者の方が、感情的、主観的だと感じている。つまり、女性回答者の方が、「男性＝論理的」「女性＝感情的」というステレオタイプを強く抱いていることが分かる。「感情的、主観的」というイメージが、「論理的、客観的」という対に対して、否定的イメージをもって受け取られていることを考えると、女性の方が、自身の性について、より否定的にとらえていることを示している⁽¹⁾。

この点から、この調査が、2の最後に引用した女子学生のことばにも明らかのように、性別判断を行うこと自体が、回答者自身にとって差別的に感じられるといった、一種のジレンマ状態に追いつめてしまうことにつながっているということも分かる。この調査をするたびに、将来社会に出ていく女子大学生の自身の性に対するイメージを、教育現場にとどまらず、一般社会に

においても肯定的な方向へ変えていくべきだと強く感じる⁽²⁾。

最後に、判断理由としてあげられた現実認識について、表8・9にまとめる。現実認識とは、男女のおかれた具体的な社会状況をめぐる認識（例えば、「20年前に役員になれるのは男性」、「女性が40すぎて再就職するのは難しい」）を示している。今回は、その中でも、特に目立った理由に絞って考えていく。

表8 <現実認識> 男性と判断した理由

		40歳すぎてまで働く・大黒柱	20年前に役員をしていた
男 性 回答者	1999年	6(75.0)	4(50.0)
	2008年	7(50.0)	3(21.4)
女 性 回答者	1999年	27(69.2)	20(51.8)
	2008年	12(50.0)	6(25.0)

表9 <現実認識> 女性と判断した理由

		子持ちの既婚女性が友人	母親思い
男 性 回答者	1999年	4(50.0)	4(50.0)
	2008年	9(64.2)	5(35.7)
女 性 回答者	1999年	28(71.7)	18(46.1)
	2008年	13(54.3)	8(33.3)

表8・9からみえてくるのは、女性と判断した理由の「子持ちの既婚女性が友人」であるとする男性回答者以外は全て、1999年より2008年の方が明らかに割合が減っているという点である。これらの判断理由はあげられた理由のうちでも圧倒的に多い項目だが、それでも、理由としてあげる回答者が男女共に減ってきている。つまり、これまでのジェンダー認識が少し薄まってきている可能性もあると考えられる。

この変化を読み解けば、「40歳すぎてまで働く女性」「役員をする女性」「子持ちの既婚女性が友人の男性」「母親思いの男性」（マザコンではなく）という認識が生まれる社会状況が確実に作られてきているのかもしれない。従来の「男は仕事で女は家庭」という認識が薄まる社会状況があるかもしれない（ただし、今回の投書の書き手としてイメージされているのが、全体として、

男性は「サラリーマン、働いている人」、女性は「主婦、仕事をしていない人」というパターンなのは、今回、調査対象とした書き手の職業が、このパターンにあてはまっているからだろう⁽³⁾。

さらにいえば、2008年の調査であげられた判断理由として興味深いものは、⑥の投書に関するものである。20年前に信用組合の役員をしていた63歳の男性投稿者は、その組合が不良債権を出したため、責任をとって自身の私財全部を提供し、退職した。この投書で、「当時、私は、42歳、子供3人を抱えて、死にものぐるいで働いた」と表現している箇所から、「妻」のことを書いていないため（いるなら書くはずだと考え）、離婚したか、死別したシングルマザー、もしくは、母子家庭ではないかとする判断理由をあげた女性回答者が3人いた（1999年では、1名の女性回答者がこの判断理由をあげている）。ちなみに、男性回答者で、この判断理由をあげている人はいない。昨今、ニュースを含むメディアにおいて、家族形態の多様化にともない、「シングルマザー」や「母子家庭」という存在が可視化され、認知度が高まったものと思われる。女性回答者の方が、より身近な存在として、シングルマザーや母子家庭をイメージしているものと思われる。

また、家族に、いるなら「妻」のことも書くはずだという認識は、比較的若い世代の人が考えることではないと思われる。年配世代の投書では、男性の場合は、政治や経済など、いわゆる「公的」なものを語る傾向にあり、「私的」なこと、たとえば家族のことなどは、あまりふれるのをよしとしないと考えられる。「私事」と断ってはじめて、家庭内のことを持ち出すケースが多い。⑥の投書でも、「私事で恐縮だが」と断って、前述した記述を行っている。さらには、家族でも、「子ども」についてはいいが、「妻」については、最後の最後である。一心同体なのか、男子たるもの、妻のことをとやかく口にするものではないという美学があるのか、投書に「妻」のことをあまり書かない。対照的に、女性の場合は、夫（「主人」）のことを気軽に口にする。「主人の転勤で」とか「主人に言われて」など、家族の中でも、夫のことをとっかかりとして投書を書く傾向にある。

このような世代間の家族観の変化は、夫婦と二人の子どもという、戦後の

高度経済成長期に想定された「標準家族」が実態とかけ離れつつあるだけでなく、社会の変化を強く受けるのが、家族であることが否応なく特に女性に認識されつつあるからではないかと思われる。

以上をまとめると、「語彙や文末表現」や「論理展開」については根強い従来の男女のイメージがあるが、「現実認識」では、そのようなイメージが少しずつ薄まってきていることを示している。現実の方が、文体などの形式をめぐるイメージやパターン化した発想に比べて、変化しているということなのだろうか。

4. 自由記述欄から読み解くジェンダー認識

投書を利用した一連の性別判断調査の最後に、このような調査に対する感想を自由に書いてもらうことにしている。投書から書き手の性を判断するという作業を実際にやってみることで、読み手である大学生自身の中にあるジェンダー認識を知覚させることをそもそもの目標としているからである。特に、今回の山一証券自主廃業関連の投書は、経済的なこと、企業経営に関することを扱っているため、「男性は経済のことに詳しい」「女性は専門的なことは分からない」といった、従来のジェンダー認識が顔をだしてくる可能性が高い。特に女性回答者の感想では、「偏見や先入観をもっている」自分に気づき、居心地の悪さを感じてしまうと訴えているのが印象的であった。男性回答者も、このような認識を吐露しているが、強い立場にいるバツの悪さからの弁明といった感が強く、その含みに差がある。

これは、女子大学生が、それまでずっと男女平等の教育を一応受けてきたのに、同性の社会人のことを（いずれは自分をそうなっていくのではないかという不安とともに）、男性の社会人に比べて、「専門的なことはわからない」「一家の大黒柱ではない」とあたかも一段下に位置づけられる存在としてみてしまうことへの不条理ともいえるジレンマを一層強く感じてしまうからだと思われる。このジレンマは、1999年と比べると、2008年には強くなっているとみられる。戦後の男女平等の教育の成果が実質的に浸透してきたといえるのかもしれないし、また、現実の社会がそれほど平等になっていないことを

強く実感してきているせいかもしれない。

5. おわりに

1999年と2008年の調査の比較からいえることは、性別判断全体の数字の上からはそれほど大きな変化はないこと、例えば、論理展開などは、依然として「男性＝論理的」「女性＝感情的」というパターンが、根強く存在しているということである。しかし、判断理由を細かくみていくうちに、若干ではあるが、ジェンダー認識に変化の兆しがあること、つまり、旧来の男性像・女性像・家族像に変化がみられるというのが分かった。社会の現実はなかなか平等ではないものの、少しずつ変化が生じてきており、そのような中で、「平等であってほしい」という思いが、特に女子大学生の中に強くあり、それゆえ彼女らのおかれている事態は複雑、まさにジレンマである。

このような調査がむしろ差別的に感じられること自体が、歓迎すべき兆候なのかもしれない。調査をする私自身、そのようなジレンマを感じている。世間にある、そして自身にも秘めている男女をめぐるステレオタイプに気づき、それに対するジレンマを感じるものが、ジェンダー認識の変化への契機となれればと考えている。

注

- (1) Makino(1979)では、自身の調査から、アメリカ人学生より、日本人学生の方が文章を判断する際の理由に、例えば「女性＝感情的」などのステレオタイプの見方をあげていたと報告している。
- (2) 本稿の冒頭に示した国連女性差別撤廃委員会の勧告にもあるように、女性に対する肯定的なイメージを作っていく必要がある。
- (3) 今回の調査対象とした投書について、男女ともに、より多様な職業、社会的背景を持つ投稿者を選択すべきであったと反省している。

参考文献

江原由美子 (2001) 『ジェンダー秩序』勁草書房

遠藤織枝編著 (2001) 『女とことば』 明石書店

遠藤織枝編著 (2007) 『ことばとジェンダーの未来図』 明石書店

熊谷滋子 (1996) 「女の文体の移り変わり」『人文論集』第47号の1 pp. 263-75 静岡大学
人文学部

熊谷滋子 (1997) 「投書とジェンダーをめぐって」『人文論集』第48号の1 pp. 345-62 静岡
大学人文学部

熊谷滋子 (1999) 「山一証券自主廃業をめぐる新聞投書にみるジェンダー」『人文論集』第
50号の1 pp. 145-63 静岡大学人文学部

熊谷滋子 (2002) 「新聞投書とジェンダー意識の調査・研究」(男女共同参画社会に向けて)
科学研究費成果報告書

佐竹久仁子 (1995) 「女の文体・男の文体」『ことば』16号 pp. 52-68 現代日本語研究会

寿岳章子 (1979) 『日本語と女』 岩波書店

中村政則 (2005) 『戦後史』 岩波新書

中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』 勁草書房

中村桃子 (2007a) 『「女ことば」はつくられる』 ひつじ書房

中村桃子 (2007b) 『<性>と日本語』 NHKブックス

波多野完治 (1995) 「男の文章、女の文章」宮城音弥編『ことばの心理』河出書房 pp. 98-128

Johnston, Barbara. (1993) Community and Contest: Midwestern Men and Women Creating
Their Worlds in Conversational Storytelling. in Tannen, D. *Gender and
Conversational Interaction*. Oxford:Oxford University Press.
pp. 62-80.

Makino, S. (1979) Sexual Differences in Written Discourses. *Papers in Japanese
Linguistics*. vol. 6, pp. 195-217.

(くまがい しげこ・静岡大学)